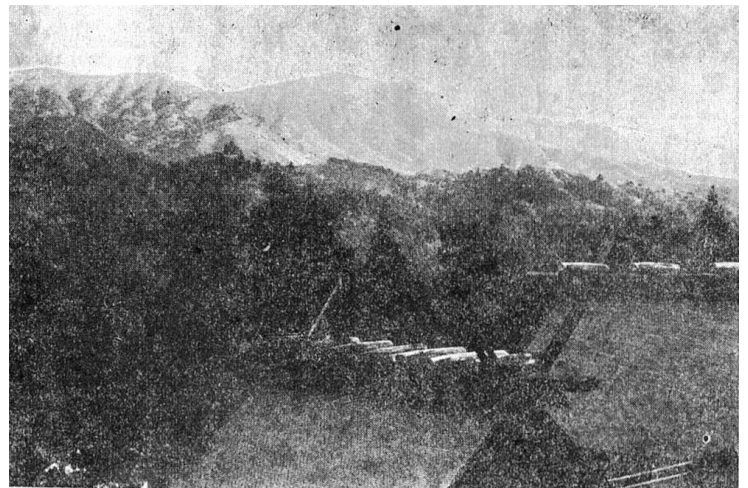


# 第 22 話 懐良親王と菊池武光

かねながしんのう きくちたけみつ  
 北 皇 親房が薨じて朝廷の威勢がいよいよ衰える。 独り九州の官軍だけが  
 せいせいしょうぐんのみやかねなが ふ そうれつ きわ ちくごがわ  
 征西将軍宮懐良親王を奉じて大いに勢いを振るう。 壮烈を極めた筑後川の戦い。  
 きくちたけみつ こきみ ぞくぐん たた  
 菊池武光が小気味よく賊軍を叩きつける。

## 北 皇 親房の薨去

しょうへい と  
 正平9年4月18日、吉野の朝廷に取っ  
 かな  
 て悲しむべき一つの出来事が起きた。 それは  
 きたばたけちかふさ あ の う こう  
 北 皇 親房が賀名生で薨じたことです。 年は  
 ちかふさ なんちよう ちゆうしん  
 63 才でした。 親房が南朝の大忠臣である  
 たびたびの こと  
 ことは既に度々述べて来たところですが、殊に  
 くすのきまさつら せんし しじょうたかすけ  
 楠木正行が戦死して、四條隆資もまた戦死  
 たの  
 してしまつて後は、朝廷の力と恃まれたのは全  
 ちかふさ  
 く親房 1 人でしたのです。



だて 福島 伊達市  
 れいざんじんじゃ 霊山神社

げんこう せいちゆう  
 元弘の乱の時から 24 年間、誠忠の

こころざし も ごだいご ごむらかみ そうだんあいて  
 志を以って、後醍醐、後村上の 2 天皇に仕え、常に御相談相手となつて、政治上の事にも、軍事上の  
 事にも、すぐれた意見を申し上げたのでした。

お はる ほくちよう おと せいりよく い ち ちかふさ  
 実際、南朝がその実力に於いて遙かに北朝に劣りながらも、よくその勢力を維持したのは、全く親房  
 たいぎめいぶん あき きんのう しよしょう ひき  
 の大義名分を明らかにして勤王の諸将を率いたからであるといつてもよいのです。 後、明治天皇は特  
 しょういちい おく あきいえ せつつ べっかくかんべいたいしや あべの まつ  
 にその功を賞して正一位を贈られた。 なお、彼の子の顕家と共に摂津の別格官幣大社 安倍野神社に祀  
 あきいえ あきのぶ もりちか いわしろ べっかくかんべいたいしや りようぜん  
 られ、顕家、顕信、および孫の守親と共に岩代の別格官幣社 霊山神社に祀られていることは、既に前  
 の  
 に述べている。

## 行宮を天野に遷し給う

ちゆうせき ちかふさ こう げんき うしな  
 さて、朝廷の柱石であった親房の薨じた事が、いかに朝廷の人々に力を落とさせ、官軍の元気を失  
 ようい そうぞう ごむらかみ みづか た みな はげ  
 わせたかは、容易に想像できます。 後村上天皇は御親ら立って、大いに皆を励まそうと思われ、その  
 あ の う あんぐう かわち あまの うつ こんごうじ かいふく  
 年の十月の末に、賀名生の行宮から河内の天野に遷られて、金剛寺を行宮とされた。 進んで京都を回復  
 あ の う ち やま ふか ふべん  
 しようとするには、賀名生の地は山が深くて不便でしたので、少しでも京都に近い上に、摂津、河内、和  
 へいや みお べんり えら  
 泉の平野を見下ろすことの出来るような、もっと便利な地をと選ばれたのです。

あしかがただふゆ やまなときうじ かいふく すで の  
 その翌十年の正月、足利直冬、山名時氏らが官軍に属して京都を回復した事は既に述べましたが、そ  
 じつ ないこう うちわあらせ さんか  
 の実、これは足利氏の内訌（内輪争いのこと）の 1 つであつて、この時、吉野の朝廷からは一人も参加し  
 た者はいなかつたのです。 京都が、間もなく尊氏らの手に奪還された事も既に述べたが、その後は、賊  
 たかうじ だっかん  
 軍の勢いのみがますます盛んになつて、この年の 7 月には、先に賀名生からお遷しして警護していた北朝

## 第22話 懐良親王と菊池武光

こうごんいん ひそ あまの だっしゆつ こうみょう すこう ただ  
の光厳院が、潜かに天野から脱出して京都に帰られ、その後、正平2月には、光明、崇光の2上皇も直  
ひと  
仁親王も脱出して京都に帰られた。

### 九州の官軍

こうして朝廷の威勢が次第に衰えた時に、ひとり九州の官軍だけは、菊池氏が征西将軍官懐良親王  
を奉じて大いに勢力を振るっていた。殊に足利直冬が帰順し、少弐氏が官軍に属してからは、官軍の  
勢いがますます盛んになって、殆ど九州全体を風靡した。尊氏はこれを聞いて大いに驚いた。九州  
は曾て自分が落ち延びて、再び京都に攻上って来たところです。勢力を養うのに最上の地です。そ  
こに天皇の御弟が官軍を統べて、その勢いが盛んであっては大変です。

### 尊氏の死

早く討たなければならないと、正平13年2月、自ら兵を率いて九州に下ろうとしたが、まだ出発し  
ないうちに、4月になると、俄かに背中に癱という腫物が出来て痛みはじめた。医者は祈祷と、それこ  
そ将軍の勢いでいろいろに手を尽して見たが、天罰が中ったのか、一向に効験がなく、苦痛は日に日に募  
って行って、遂にその30日に苦しみ死にしました。年は54才でした。彼がほしいままに幕府を開いてか  
ら21年目に当ります。

### 尊氏の罪悪

足利尊氏は後醍醐天皇の厚い恩賞をこうむりながら、それにお報いしようともせず、却って謀反を  
企て、天皇を苦しめたのみならず、皇太子を弑し、皇子を害し、天下の大乱を惹き起こして多くの忠臣  
を殺し、遂には所謂北朝の天皇をお立てして、自分の野心を遂げると共に賊の名を免れようとしたので  
す。大不忠の逆賊であることはいうまでもありません。さればこそ、幕府を開いて政治を執ったと  
はいえ、天下は嘗て1日も治まらず、1年として戦乱の起こらない年はなかったのです。後には、部下  
の諸将を始め、現在の弟(直義)や実の子(直冬)までが彼に叛いて、血で血を洗う醜い戦乱を繰り返  
さなければならぬように迄なりました。

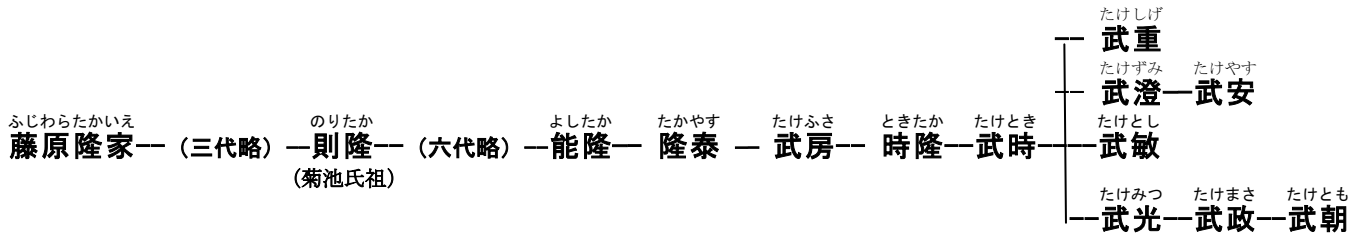
### 天龍寺の建立

後醍醐天皇がお崩れになった後に、尊氏は京都郊外の嵯峨に天龍寺を建てて、天皇の冥福をお祈り  
しましたが、彼もさすがに日本人の良心に咎められて、天皇の御恩に背いた事を悔いたのでもありましよう。  
足利尊氏の墓は京都市上京区の等持寺に在り、彼の木像もまたその寺に在るが、後世の勤王家は彼の罪悪  
を憎む余り、この木像を持ち出して京都の三條河原に梟したり、或いは彼の罪を数えてこれを鞭打ったり  
した。

尊氏が死ぬと、その年の12月、子の義詮が後光厳院から征夷大將軍に任ぜられたが、これもまた  
正当の將軍ではないことは、いうまでもありません。

さて九州の官軍ですが、尊氏が俄かに死んで、京都から賊軍が下って来ることもないとなると、官軍

の勢いはますます盛んになるばかりでした。これは、1 つは、<sup>もちろん</sup> 勿論<sup>かねなが</sup> 征西将軍宮懐良親王<sup>いこう</sup> の威光<sup>よ</sup> に依るものですが、また 1 つは、<sup>たねんきんのう</sup> 多年勤王<sup>こころざし</sup> の志<sup>か</sup> を<sup>ちゅうぎ</sup> 渝<sup>つく</sup> えずに、親王を奉じてよく<sup>きくちし</sup> 忠義<sup>あづか</sup> を尽した菊池氏の力が与って多かったです。



きくちし きんのう  
菊池氏の勤王

そもそも菊池氏は、平安時代に、朝鮮半島の東北部に住んでいた刀伊という部族が九州を侵した時に、これを撃払って手柄を立てた大宰権帥藤原隆家の末裔で、代々肥後(熊本県)に住み、古くからの豪族でした。菊池氏を称したのは、則隆の時からで、承久の乱には、則隆が朝廷方となって、忠義を尽くし、元寇の時には、武房がしばしば敵艦を襲って勇名を轟かせた。

先に後醍醐天皇が隠岐を遁れて伯耆(鳥取県)の船上山に遷らせられた時に、武時が勤王の兵を起こして以来、子の武重、武敏らが続いて忠義を尽したことは既に述べました。わけても武敏は、尊氏が九州に落ちて来た時に、大軍を率いて、多々良浜にこれを邀え撃つたのですが、不幸にして敗れたのでした。

せいせいしょうぐんのみや かねなが  
征西将軍宮懐良親王

その後、暫く菊池氏の勢いは賊軍のために圧迫されて、振るわなかったのですが、正平 3 年正月、菊池武光が懐良親王を奉じてその居城にお迎えしてからは、次第にその勢力を回復し、正平 11 年 10 月、尊氏党の九州探題一式範氏の一族を完全に九州から追い落として、長門(山口県西部)に走らせ、正平 13 年の春、遂に京都に帰らなければならなくさせるに至って、九州は殆ど全く官軍の手に帰したのです。尊氏が自ら兵を率いて九州に下ろうとしたのはこの時の事でした。

ふらち しょうによりひさ  
不埒な少武頼尚

ところが、ここに不埒なのは少武頼尚です。彼が官軍に属したのは、前にも述べたように忠義の心からでは全くなくて、長い間の敵であった一色氏に対抗して、これを九州から追い落とすために官軍の力を借りようとしたからです。今、既に一色氏が敗れて京都に帰ってしまった上は、もはや官軍に属して忠勤を励む必要がなくなった上に、肥後の菊池氏もまた父祖以来の仇敵ですから、今度はこれを討って勢力を回復して、進んで九州全体を自分の物にしようという野心を起こしました。

けれども、その頃、官軍の勢いは頗る盛んでしたから、容易に乗ずる隙がない。それで、窃に機会を窺っていると、正平 13 年 10 月、菊池武光が日向(宮崎県)の賊軍を討つために出発して留守となったので、この機会にこそと、豊後の大友氏時と謀って官軍に叛き、阿蘇氏をも身方に入れて、3 方から菊池氏攻撃の軍を起こした。

## 第22話 懐良親王と菊池武光

### ちくごがわ たたか 筑後川の戦い

たけみつ いそ ひゅうが ぞくと たい ま けち ひご しんにゅう  
武光はこれを聞くと、急いで日向の賊徒を平らげて帰り、先づ阿蘇氏の軍を蹴散らし、肥後に侵入しようとしている大友氏時の軍を討って退けると共に、最も大敵である筑前（福岡県北部）の少武頼しゅうにより尚よりひさに向かって合戦の準備を始めた。翌14年3月、彼は一族と共に懐良親王を奉じ、8,000余騎を率いて筑後（福岡県南部）に入り、筑後川の平野に川に沿って陣を布いた。頼尚も又大軍を率いて筑後に出て、筑後川の向こうに陣を取った。

かくして、敵と身方と、初めは河を挟んで相対していたが、7月19日、菊池武光が手兵5,000余騎を率いて河を渡り、頼尚の陣に押し寄せると、頼尚は何と思ったのか、戦わずに30町（3.2km）も退いて、大保原に陣を取った。武光はつづいて攻めようとしたが、間に深い沼があつて、うかとは進めなかったもので、又もや互いに睨み合ったままで月を越した。

### よりひさ きしゅうもん 少武頼尚の起請文

この時、両陣の間は僅かに隔たったばかりで、旗の紋もはっきりと見えるほどだったので、武光はわざと頼尚を恥かしめるために、嘗て少武頼尚が武光に渡した起請文を旗竿の先に付けて敵味方に示したという逸話があります。

それは、前年、頼尚が一色範氏の子の直氏に攻められて、すでに討たれるばかりとなった時に、武光が援兵を出して助けてやったので、頼尚は大いに喜び、感謝の意を表すために、今より後、子孫七代に至るまで、菊池の人々に向かって弓を引き、矢を放つことは致しませねと、血をしぼって起請文を書いたのです。それが1年も経たないうちに、忽ちその誓いを破ったのですから、天にも訴え、人にも知らせずて恥づかしめようとしたのです。

### おほぼる けっせん 大保原の決戦

かくして大保原に対峙して半月余も経ったが、遂に菊池武光はもどかしくなり、いっそ最後の決戦をしようとして決心して、8月6日の夜、かねて夜討ちに馴れた兵士300人を選んで別隊として、迂回して敵の背後にまわらせ、自分は親王を奉じて、7,000余騎を3隊に分け、河の水音にまぎれて敵の正面から一時にどっと攻め寄せた。頼尚の軍は不意を討たれて大いにあわて、ここに一大混戦が行われた。

武光の子の武政は、例の起請文を付けた旗を真先に進めて、先陣をし、少武頼尚の嫡子の直資を撃つてこれを戦死させたが、敵も中々勇敢であったので、身方にも討ち死にした者も少なくなかった。

懐良親王は第3隊を率いて、菊池武光らと敵の本陣に攻め込まれたが、少武頼尚が全力を尽して防戦したので、ここは最も激しい合戦となり、親王も御身に創を3ヶ所まで負われたが、なお勝敗は決しない。武光、武政らはこれを見て、今は残らず討死にせよと将士を励まし、真先に駆入って奮戦した。敵はこれを見知っていたので、射て落とそうと鏃をそろえて雨の降るが如くに射たけれども、武光が着た鎧は非常に丈夫でしたから、裏に通る矢は1つもなかった。





おごおり 小郡市 起 請 文を掲げて 少 貳頼尚を大保原に破る 菊池武光

馬は射られても倒れても、乗り手は創を受けないから、乗替えては駆入り、駆け入り、17 度までも駆けた時に、武光は胃を落とされて小鬘を二太刀ほど切られた。いよいよ討たれた、と見えたが、敵将と組んで馬から落ちて、敵将の首を取って切っ先に貫き、胃を取って、着て、敵の馬に乗り換えて、また敵の中に破って入った。朝の6時から暮の6時過ぎまで、一息も継がずに奮戦したので、遂に頼尚の軍は支えきれずに退却を始めて、大宰府に退いた。

こうして官軍は大勝利を得たのですが、身方にも死傷者が非常に多く、逆も追撃することは出来なかった。一先づ肥後の本拠に引き上げた。世にこれを筑後川の戦いといいます。

この時、少貳頼尚は全力を挙げて、しかも大敗したので、大いに勢力を失ったが、やがてこれを回復しようと計り、大友氏時、阿蘇惟村らと共に頻りに官軍に打撃を与える策を立てた。けれども、その後も菊池武光は戦いを交える毎に頼尚を破って、遂に正平 16 年 8 月には完全に大宰府から少貳氏を

## 第22話 懐良親王と菊池武光

くちく せいせいのみや しょうぐん ふ すす  
駆逐し、征西宮の将軍府をここに進めた。

### 官軍の勢いが振るう

かねなが いせい  
懐良親王の威勢はこれよりもますます盛んになり、その年の10月、新たに幕府から九州探題に任ぜられて下って来た斯波氏経の如きは、豊後（大分県）の大友氏時と謀り、或いは周防（山口県東南部）の大内弘世と謀って、軍を筑前（福岡県北部）に進めてみたが、官軍の一撃の下に引き退かざるを得ず、遂に九州にも留まることが出来なくなって京都に帰った。

つ さら しぶかわよしゆき くだ びんご とて  
尋いで幕府は更に渋川義行を九州探題に任じて下させたが、彼は備後（広島県東部）まで来て、迎も九州に入ることの出来そうにないのを見て京都に引き返した。いかに九州に於ける官軍の勢いが盛んで、賊軍の勢いが衰えていたかが分かります。

かねなが いせい ひと と よせい およ  
いやいや、懐良親王のご威勢は独り九州だけに止まらなかった。その余勢はやがて四国方面にも及んで、久しく伊予（愛媛県）の賊将として有名であった河野氏までが、遂に親王に降参を願い出て許された。それは正平二十年の八月でした。

### 懐良親王の東上計画

かねなが どうじょうけいかく  
かくして親王は、河野氏を案内者として、瀬戸内海を東上し、吉野の官軍と力を協せて、先帝以来の大目的である京都の恢復を成就なさろうと計画され、先づご自分が東上の後の九州を鎮めるために、別に征西将軍官をお遣わしになるようにと吉野の朝廷に乞い、後村上天皇の皇子良成親王をお迎えして、着々とその準備をされながら、密かに機会を待っていました。

あしかがよしあきら し わづ よしみつ あと つ  
すると、正平22年12月7日、足利義詮が38才で死んで、僅かに10才の義満が終を次ぐことになったために、幕府の人々の間には何となく不安の気が漂いかけた。親王はこの機会を利用して東上の実行を図られ、正平23年2月、九州の将士70,000余騎を率いて、豊後（大分県南部）の鶴崎の港から船をだされたのですが、瀬戸内海に差し掛かった時に、周防の大内義弘の水軍のために撃ち破られて、余儀なく九州に引き返された。

こころざし す かいじょう けんりょく  
けれども、親王は決して東上のお志をお捨てにはならなかったもので、先づ瀬戸内海の海上の権力を官軍の手に収めてから、徐に東上することにしようと思われて、第2段の計画を立てられた。

ふこう ごむらかみ かく  
ところが、ここに親王に取って最も不孝な悲しむべき出来事が起こった。それは後村上天皇がお崩れになったことでもあります。

かねなが  
( 第22話 懐良親王と菊池武光 終わり。次は前頁に戻り、第23話 諸国官軍の衰勢へ )